

「パーマカルチャー」という概念に倣って、全体を見る目を養い、事業経営に活かした二つの事例に学びます。

オーストラリアのビル・モリソン氏が提唱した「パーマカルチャー」という概念は、地球上を森で埋め尽くすことを目的とします。その考え方は、つねに全体を見る目を持ち、様々な生き物の関係性と役割を把握し、お互いが活かされ合う環境を目指すというものです。

モリソン氏は「パーマカルチャー」の中で3つの倫理規定を紹介しています。

- ①地球への配慮：地球の存在なしに、人間の存在はあり得ない。人間は大地の守り人。
- ②人への配慮：まずは一番近い人への配慮、つまり自分自身。そしてすぐ隣にいる恋人・家族への配慮。さらに遠くの空の下、同じ地球の空気を吸っている人びとへ。
- ③資源を共有する：他者から奪うことなく、分かち合う。与え合う。

そして実践方法の一つに、自然のシステムをよく観察することを挙げています。この観察という実践は、自然だけでなく、社会を観察することでも有効でしょう。

*

日本に目を向けてみると、パーマカルチャーの先駆者とも呼べる事例が二つあります。江戸時代と昭和後期から平成時代にかけての事例をご紹介します。

自然賛歌

捨てる物も 活かせば使える



一つは江戸時代、井原西鶴の著した『日本永代蔵』にあります。元手がなくても、世間をよく見ているうちに、人が捨てるような材料に貴重な資源があることに気づき、有効活用して大きな財をなした人物が載っています。

武家屋敷の大工仕事で、一日の終わりに二団が戻る際、小僧が鮑屑や木っ端を担いで帰路につきます。その際、桧のきれっぱしを落とすのを見て、それを拾い、かなりの量になり、箸を作ったところ、品質も良く売れたため、ついには材木屋を営んだという実話に基づいた物語です。もう一つは、昭和六〇年代から平成初期に、新たな事業を展開した経営者の話です。捨てられてしまう間伐材や、製造上の余剰物となる端材に着目し、自然の資源に捨てるものは何もない、最後の一斤まで使い切るをモットーに商品化に挑み、小さな洗濯板を考案し、大ヒットを生みました。各家庭に洗濯機が普及している現代でも、出張する人や若い女性に需要があったのです。

この経営者は、酸素や水を育んでくれた木に心から感謝して丁寧に使い、お客様に喜んでいただけると木製品を創造しお届けしていきます」と、信念を述べています。

『万人幸福の葉』には、自然は真理の百科事典「目を開いてこれを見、口をすすいでこれを味わい、心を空にしてこれに対する」と、自然に即して生きることで、正しく導いてくれることを教えてくれます。

私達も、時には、心を空にして、まずはよく観察することからはじめてみてはいかがでしょうか。